

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	S00Thと「挟み統率」から開ける展望：ドイツ語 sich V lassen 構文を中心に
Author(s)	田原, 薫
Citation	ニダバ, 25 : 137 - 146
Issue Date	1996-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047996
Right	
Relation	



SOOTh と「挟み統率」から開ける展望

— ドイツ語 sich V lassen 構文を中心に —

田原 薫

要旨：

チョムスキー派の統語論が極限まで抽象化し、熱烈なマニア以外の学者・学徒にとっては極めて難解で、魅力も説得力も感じられなくなり、研究の対象から放擲される傾向が最近顕著になった。殊に「統率」の概念は、さしたる成果を挙げないまま、最近のミニマリスト・プログラムでは殆ど語られることがなくなっている。たしかにチョムスキーが定義した「統率」の概念は重大な矛盾を含んでいて、そのままでは統語分析に役立たない。しかし、それに或る種の修正を施せば、かなり有力な理論装置となり、大いに役立つものとなる。要点は、上部の統率子から来る統率力を、被統率子の指定辞にまで及ぶように改革することである。そうするとその指定辞は句の内外から共同で統率されることになり、句の境界に跨がる重要な文法機能を果たすことができるようになる。このような状態におかれた指定辞を、内外から「挟み統率」されていると呼ぶ。

「挟み統率」の概念を有効に使うためには、従来のVPなどの内部構造を改編する必要がある。主語候補を指定辞に、目的語候補を補語においた従来のVPを改め、目的語候補を指定辞に、主語候補を補語にした新しいVPの構造を設定して、種々の文法問題を考察する理論を私は‘SOOTh’ (Specifier-Original Object Theory, 目的語指定辞起源説) と命名し、1994年度の関西言語学会の発表会(第19回)で発表し、1995年度の紀要(No15)に小論を寄稿した。そこでは他動詞能動および受動構文の同一基底からの派生や、句動詞(すなわち前置詞付き動詞)による能動型および受動型の構文の派生、例外的格付与構文や、いわゆる「that-痕跡効果」のメカニズムの説明などを扱った。

今回は、これまでの概括的回顧の上に、或る文成分NPの上に複数の統率力が掛かって、見かけ上どちらの統率子の項とも見えるようになる構文を考察してみるつもりであるが、特にドイツ語の「lassen再帰中間構文」すなわち‘Das Buch läßt sich leicht lesen.’のような構文を主に取り上げたいと思う。この構文において、das Buch と共指示の sich は lesen (読む) の目的語のようにも見え、同時に läßt (許す、身を委ねる) の目的語であるようにも感じられる。なぜそうなのかという問題を、このタイプの構文の意味的成立条件の考察とも絡めつつ、‘SOOTh’による解明を試みる。

1. 目的語指定辞起源説の概観

本稿の拠って立つ理論的枠組たる「目的語指定辞起源説, Specifier-Original Object Theory, 略称S O O T h」は田原(1994)「経済性とV P内主語説の疑問点」『ニダバ』第23号 p.138~142で示唆した考え方をelaborateしたものである。以下, Sooth と書いて [su:θ]と読むことにする。ちなみに, 英語にある'sooth' という語は「真実」という意味であって, 'soothsayer'が「真実を語る人」すなわち予言者という意味になっている。別に駄洒落にこだわる気はないが, 本説の賛同者を'Soothsayer'と呼ぶことにしたい。

さて Soothというのは, その日本語での呼び方でわかるように, 他動詞句・前置詞句の内部で, 基底の構造において目的語(の方)が指定辞の位置に生じた, という主張を基本とする理論である。従って他動詞句の場合, 主語候補のNPは当然Vの補語の位置に発祥したと考える。従っていわゆる「V P内主語仮説」とはまったく逆の立場を取るわけである。「V P内主語仮説」とは実に傲慢な命名であって, 「V P内」は「V'内」も含む筈なのに, 彼らは「V P内」を指定辞の意味に限定して使っている。そこで, それに対抗して, 他動詞句という舞台でのSoothの顕現を命名するなら「V'内主語説」ということになるが, 他動詞句以外での顕現を含めると「X'内主語説」ということになる。

1. 1 統率・引率・配(／輩)率・共(／挟)統率の概念

図1 A

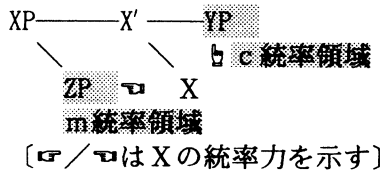


図1 B

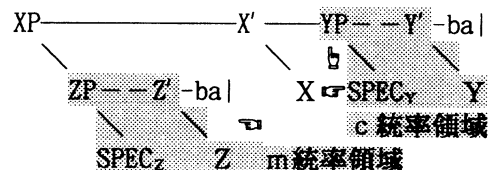


図1 Aは, Xがゼロレベルの語彙範疇の場合, 自分の補語と指定辞を統率することを示すが, 補語については仮に「c統率する」といい, 指定辞については「m統率する」ということにする〔それぞれc-command, m-commandの概念と関連している〕。しかしそれらの統率の範囲を詳しく見ると, 図1 Bに示すように, チョムスキー(派)の'government'のそれとは違っている。以下では図1 Bで網掛けをした部分を統率の範囲と呼ぶことにするが, 彼らのシステムとの違いを明示するために, Xは図1 Bのc統率領域の成分を「引率する(in-sort)」と云い, 同じくm統率領域の成分を「配率／輩率する(high-sort)」と呼ぶことにする〔英語の術語は日本語のそれと発音が近くなるように選んだが, 'sort'には「選別する」という意味があり, それぞれ下位・上位の成分に働くからである〕。図で-ba|は障壁を表し, 統率力が堰き止められてそこから先には及ばない。なお, Xが語彙でない機能範疇の場合は, 引率の能力を認めず, Xは「配率」だけすることになる。

さて, 図1 BでYも語彙範疇であるとすると, 当然SPEC_YはYに配率される。従って,

SPEC_v は Y に配率されていると同時に X に引率されていることになる。このように上位・下位の統率子から引率と配率を受けて、いわば両者の統率力で挟まれている場合、SPEC_v は「X と Y から共統率／挟統率されている (be co-sorted/tong-sorted)」と呼ぶことにする〔‘tongs’ は鋏状またはピンセット状の火ばさみを意味する〕。どちらも読みは「キョウトウツツ」であるが、わかりやすく「挟み統率」といってもよい。

1. 2 他動詞能動構文の構造

前節で提起した諸概念の有効性を検証するために、まず他動詞能動構文を分析する。

図2 〔他動詞能動構文の構造〕
〔田原(1995a, b)を参照〕

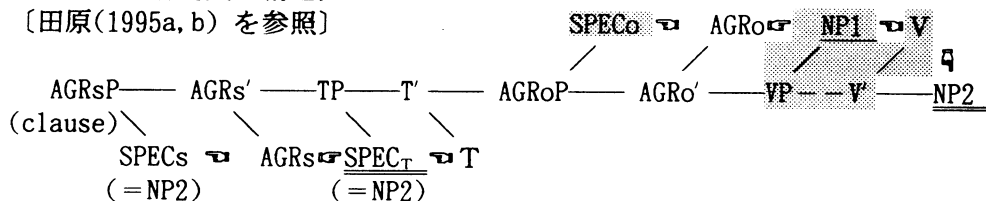


図2は英語の他動詞能動態の平叙文をモデルとした統語分析の結果であり、後に触れるドイツ語の場合と語順（枝の向き）の点で若干異なるが、基本的な階層関係はほぼ共通と言ってよい。AGRsとAGRoはそれぞれ主語と目的語のための格／一致照応要素であり、抽象的な形容詞であると見なす。ただし格の照合に関与する特殊性をもつ。

さて、NP1(受動者項)とNP2(能動者項)の格を認可するために次の原理を仮定する。

共統率による格選択の原理：

- ① T (独立時制＝過去／非過去の場合) と AGRs はその共通の被統率子に主格を格選択する。〔統率の概念は上述のとおり：引率 (⇨) と配率 (⇩) を含む〕
- ② V (V 痕跡を除く) と AGRo はその共通の被統率子に対格を格選択する。
- ③ P (前置詞或いは斜格選択子) と AGRz はその共通の被統率子に斜格を格選択する。
〔③は当面の議論には関係がないが、原理の必要な一項目であるから挙げた。〕

図の NP1 は V と AGRo に共統率 (挟統率) されているから、原理の②項が適用される。すなわちその場で対格を認証されるから、格照合を求めて他所へ移動する必要がない。

次に NP2 についてであるが、これは V に引率されているものの、そのほかに統率を受けていないから、現位置では格選択され得ない。従って格選択を可能にするための移動の原理が必要になってくる。そこで次の原理を仮定する。

格選択上の移動の優先順位：そのままの位置で格選択される成分は移動してはならない。
そうでない場合は、格選択に寄与する要素1個のみに統率されている成分を優先的に格選択可能な位置、すなわち共統率を受ける位置に移動せよ。
格選択に寄与する要素1個にさえ統率されていない成分は、それを生かしたければその資格を変更せよ。

estar の二つがあり、状況が恒常的か一時的かによって使い分けられる〕。すると、本来機能範疇だったTがコンピュータとの合体によって語彙範疇的性格を帯びるので、その合成体はSPECa を引率するようになる。そこでSPECa は外転してSPEC_T に転入することが可能になる。ここでそれはAGRsとTから共統率されて主格を認可される。最後にそれは一致制御のため外転してSPECs(文主語)の座に就く、という筋書きになる。結局NP1 は次々に直近上位の指定辞位置を歴任して上昇して行ったわけであるが、SPECa を勤めた際にAjに対して一致情報を流して語形(fino/ fina)に影響を及ぼす。英語では形容詞の一致現象はないが、語彙選択(handsome, buxom)のチェックがあるから、同様に考えた方がよい。

次は「この本は読み易い」のような難易文であるが、これは単文として処理できる。

(2) This book is easy for John to read.

図4 [AjEH=Adjective 'easy' / 'hard']

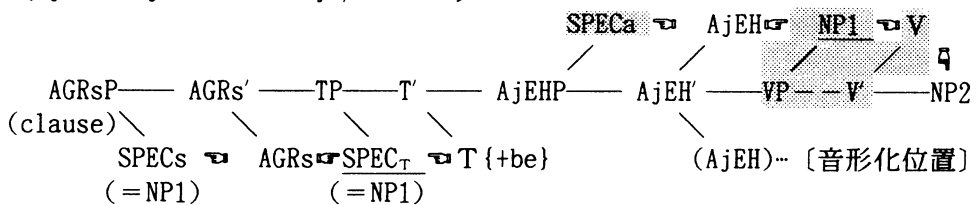


図4で、網掛けをした部分は難易形容詞(AjEH)の統率領域である。NP1 はやはり受動者項であるが、VとAjEHに共統率されている。その点で図2の能動構文の構造と似ているが、違う点は、AjEHが格選択に寄与する性質をもっていないことである。そのためNP1 は生起現場では共統率による格認可を受けられない。しかしNP1 は外転によってSPECa に入ることができる。一方、VPはAjEHに補語として引率されているので、図3に類推すると、このVPは名詞性を帯びていると見なすことができる。この名詞性はVがTと融合するのを妨げるので、Tはコンピュータの来援がないと音形を獲得できない。Tがコンピュータと合体すると、図3の場合と同様、もとのNP1 が外転⇨外転…の連続で最終的にSPECs に就任することができる。一方NP2 は格認可の手段を絶たれ、難易感の経験者と再解釈されて、for Johnのように斜格標示に生き残りを賭けるしかない。

2. 2 他動詞受動構文の構造

コンピュータ+過去分詞の構造をもつこの構文もコンピュータ文の一種である点に変わりない。

(3) Bill was bashed by John. 「ビルがジョンに殴られた」

図5 (次頁) は基本的には図2と同じ骨格をもっている。すなわち能動・受動の両構文は同じ基底構造から分岐派生するのであって、受動構文専用の句構造は不要である。図5はまた図4とも近く、受動者NP1 が主語に進出する点でも共通している。図5で網掛けを施した部分はAGRoの統率領域であるが、注目すべきは他動詞語彙VがAGRoに移動編入されることである。ここでできるAGRo+Vの複合体が実は過去分詞に他ならない。

図5 〔他動詞受動構文の構造〕

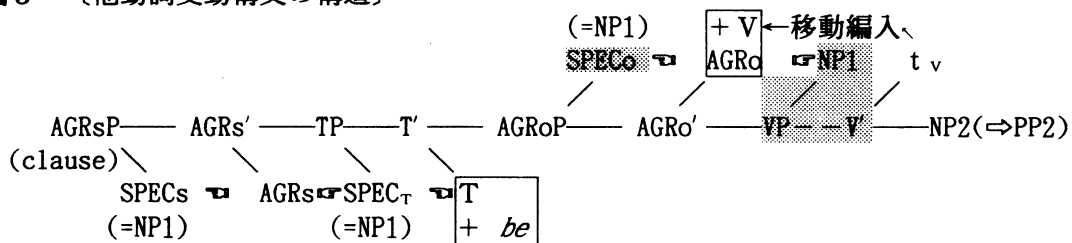


図5でVがAGROに吸収編入されてしまうと、Vもとの位置が痕跡になるが、痕跡には格選択に寄与する能力がないので、NP1は共統率による格選択を受けられなくなる。しかし図3・図4の場合のように外転の連続でSPECsまで昇進する道が開けている。VがAGROに吸収されてしまうので時制の乗り物たるVがなくなり、代償的にコピュラがTに付加されるが、これがTに語彙的性格を付与し、SPECcoからSPEC_TへのNP1の外転を許す。一方能動者NP2の方は、格選択に寄与する要素にまったく統率されなくなったので、生き残るためには資格変更が必要になり、斜格標示(PP化)に頼らなければならない。なお、Tに付加されるコピュラはドイツ語の werden のように動的なものであることもある。

3. (再帰) 中間構文の分類と意味論的分析

以上2章で述べたSoothの基本的な予備知識をもって頂いたところで、中間構文といわれる This book reads easily. のような構文の構造を同じ枠組で考察してみる。

- (4) This book sells well. /*This book buys well. 「よく売れる／*よく買える」
- (5) Das Buch verkauft sich gut. /*Das Buch kauft sich gut. [同上]
- (6) Das Buch läßt sich gut verkaufen. /*Das Buch läßt sich gut kaufen.
- (7) Cet ouvrage se laisse lire. Fr. 「この作品は読ませる」(俗語)

中間構文は意味上「目的語」になっている対象〔おもに無生物〕が恒常的にもつ特質を(同類との比較において)叙述するのに使われるが、その型式を分類するとほぼ3種類になる。まず(4)のように他動詞能動構文と表面上同じ形のもので、英語ではもっぱらこの型に限られる。次いで(5)のように再帰代名詞を伴うもので、ドイツ語やフランス語、広く言って英語以外のゲルマン語やロマンス語に分布する。第3に、ドイツ語に特に顕著な sich V lassen の構文で、本稿はこれに焦点を据えて考察したい。この構文はまったくドイツ語独特というわけではなく、(7)のような文例も辞書〔小学館ロベール仏和大辞典〕に載っているけれども、marginalであろう。

中間構文の特徴はいくつか指摘できるが、興味深いのは、通言語的に「よく売れる」はよいのに「よく買える」はおかしい、といった現象があり、これは深い意味論的理由から来ているようである。本が売れるのはその本がもつ本質的な特質或いは「徳性」ともいえるもののせいであるが、買う行為は必ずしも本の「徳性」のみに誘発されるのではない。

本の売買はともに人間が行うが、その取り引きの主体性は通常買い手の側にあり、買い手が買おうと思わなければ売買は成立しない。つまり買う行為については本の徳性（長所）よりも行為者の意志がコントローラーとしてより重要なので、中間構文になりにくいのである。しかし、一般に物資、特に本が不足していて、買い手は常に本を欲しがっていて、本屋がお情けで「売ってやる」というような状況（社会）、或いは図書館が乏しい予算をやりくりして特定のジャンルの本を何冊か買おうという場合などでは、「この手の本ならまずまず買える」‘Bücher von solcher Art lassen sich mäßig kaufen.’と言うことは適切である。このように(6)のタイプの文の適否は状況によるし、通常一個人が同じ本を何冊も買うことはない、という社会的常識にも依存する〔(6)の後半の文など〕。

中間構文は通常副詞を伴うのが普通であるが、その副詞には(a) leicht(easily), mühe-los(without trouble), mit Mühe und Not (やっとのことで)のように、行為者が行為を遂行するにあたって感じる抵抗の手応えを表すものと、(b) fein(fine), gut(well)のように主語である受動者が動詞の行為をうけた結果の「仕上がり」を表すものがあり、これに(c)動詞本来に係る副詞も出現するから、それらの間の統語上の区別が必要となる。

また、中間構文は（おもに）対象物の恒常的特質を叙述する機能をもつから、その時制はstativeな現在（或いはstativeな未完了過去など）に限られ、特定時の事件を表すような完結的アスペクトをもつ時制には使えないし、進行アスペクトにもなり得ない。このことは、中間構文が形容詞コピュラ文、とりわけ難易文と共通する意味的（認知的）構造をもっていることを表すもので、統語分析にもそのことが反映されなければならない。

4. (再帰) 中間構文の統語分析

4. 1 ドイツ語の他動詞構文の句構造

中間構文は他動詞を使った構文であるから、何語の場合でも他動詞構文を基盤とする。ドイツ語は基底の樹形図において英語とは枝分かれの向きなどが違うと考えられる。

図6 〔ドイツ語能動構文の構造〕

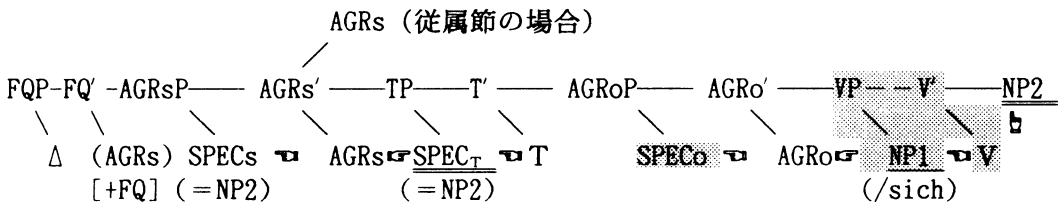


図6においてAGRsが、そこに時制要素Tと動詞本体Vが集積されて定形動詞が音声部門で形成される場であると考えられるならば、その位置は三つ考えられる。まずSVO型の基本配語法においては単にAGRsと書いた位置、ついでSOV型の従属節における配語法の場合は「AGRs (従属節の場合)」と記した位置、そして(X)VS(O)(?)の型に現れる場合はFQに転編入された位置である。このFQというのは焦点化(F)と疑問化(Q)に関

係する抽象的な要素である。そしていわゆる左方転移成分は、疑問詞を含めてSPEC_{FQ}すなわち△位置に入るものと見なす。それに応じて定形動詞 (AGRs + T + V) がFQ位置を占めることになる。以上で定形動詞の配置の問題は片付く。ほかにドイツ語には「分離前綴」や否定辞の位置など難しい問題があるが、今は保留しておく。

さて図6を詳しく見ると、基本的な部分は枝の向きを除き図2と同様であるが、中間構文の場合NP1の地位に sich (或いは人称代名詞の再帰形) が必ず入る。英語でもこれに相当する無音の成分がここを埋める、と考えた方が他のヨーロッパ語と整合的で都合がよい。また図6だけにあるFQの投射領域は、実は英語においても疑問詞をもつ辞句や否定辞や only を伴う辞句など、助動詞転倒を引き起こす成分を収容するために、いずれ必要になる構造であるから、図6だけが特に変わっているわけではない。

ところで、図のNP1に入る sich とNP2との関係であるが、NP2が能動的に状況をコントロールするかどうかによって二つの場合が考えられる。まずNP2がAGENT、或いは少なくともeventに対して多大の責任がある場合は、構文は真の再帰構文或いは「能動的再帰構文」であって、中間構文ではない。

それに対して中間構文の場合は、問題の対象が本質的にもつ「徳性」(virtue)が、他動詞で示される外部からの行為に対して対象本体を曝したり防いだりして、被る影響を左右するのであるから、内在的「徳性」の方が対象本体よりもagentivityが高い、と見ることができる。そのことを統語構造に反映させると、内在的「徳性」がNP2に入り、対象本体の方がNP1に入るのが妥当と考えられる。いま対象本体を仮に‘Buch’とし、内在的徳性を‘Sich_{Buch}’と記すならば、本来ならばNP2が‘Sich_{Buch}’であり、NP1が‘Buch’でなければならない。しかし‘Sich_{Buch}’は固有の主格の音形をもっていないので、主語に進出することができない。対格ならば sich として実現することが許される。そこでこのジレンマ救済のために、NP1とNP2の間で語形の交換が起こる、と考えることにする。この過程を経ることによって、たとえば verkaufen (売る) という行為に対して本来なら受動者である Buch がNP2の地位を占め、能動構文の生成と同じ過程を経て、主語(AGRs)に進出することが可能になったのである。〔例文(6)参照〕

4.2 ドイツ語 ‘sich V lassen’ 構文の統語分析

この型の構文にも真の再帰構文を含む場合と中間構文である場合があり、時には表層上の形がまったく同一なのに意味上ambiguousになる例もある。横山真樹氏が関西言語学会第20回大会で発表された際にハンドアウトに挙げられた例は次のとおりである。

(8) Sie läßt sich tragen. ‘She has/is having herself carried.’ (lassen-使役構文)

‘She allows/is allowing herself to be carried.’ (lassen-許容構文)

(9) Sie läßt sich tragen. ‘She/it can be carried.’ (lassen-中間構文)

横山氏はこれに続いて「文法構文の言語形式は意味に基づいて動機づけられているとい

う認知論的言語観に立ち、文法形式において一致している両構文の意味的関連性を探る」と記して発表の目標とされている。しかし、はたして両構文は文法形式において一致しているのだろうか、という疑問が起こる。もし両構文が「深層においても」文法形式が一致しているのであれば、更なる文法的派生に対しても同様に振舞う筈であるが、どこかで異なっているならば、何らかの派生の操作に対して統語形式上、または意味解釈上の違いが生じてくる筈である。そこでたとえば法助動詞 können を(8)(9)両者に掛けてみよう。

(10) Sie kann sich tragen lassen. 「彼女は運んでもらうことができる」=deontic

[lassen- 使役構文] 「彼女は運んでもらっているかもしれない」=epistemic

(11) Sie kann sich tragen lassen. 「*彼女は運べるようになることができる(??)」

[lassen- 中間構文] 「彼女は運べるかもしれない」=epistemic

このように(11)の lassen-中間構文においては deonticな可能の意味をもつことができない。両構文の文法形式の一致は表層的なものにすぎないようである。

そこで、上述の横山氏の文言を「文法構文の言語形式の違いは意味に基づく動機づけが異なるからである」と読みなおすと、両構文それぞれの統語分析をしてその相違点を明らかにしなければならなくなる。実はそのヒントは前節ですでに提起されている。すなわち対象本体を表す実語彙名詞と再帰代名詞との語形の交換がやはり鍵なのである。

図7は(12)のSoothによる統語分析の結果である。

(12) Das Buch läßt sich leicht lesen. 「この本は易しく読める」

図7

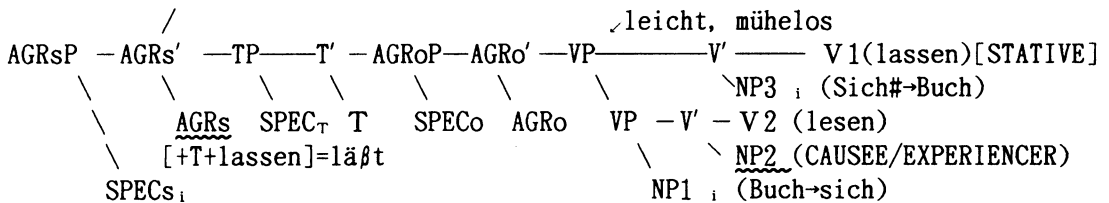


図7をまず右側から見ていくと、V1(lassen)を主辞とするVPがあり、その補語の地位にNP3が就いている。これはSoothの規約からして相対的に能動者性(agentivity)が高い方の項でなければならない。何に対して高いかという点、このVPの指定辞に対してである。このNP3はlassen(許容)する者(物)としての、Buchがもつ内在的徳性Sich#である。次にVPの指定辞は、と見ると、それはNPでなく別のVPになっていて、その主辞はV2で示すlesenで、その補語がgenericな人であるNP2(CAUSEE/EXPERIENCER)である。この項は他動詞V2(lesen)の行為を起動する能動者ではあるが、今の局面ではその行為に対して対象たる事物の内在的徳性(virtue)の方が状況のコントローラーとしてより大きく評価されている。NP2は従って能動者性よりも「手応えや結果の善し悪しの感受者」としての性格が強い。そしてV2(lesen)の指定辞は受動者たるNP1(Buch)そのものである。

ところで、図7で何が文主語に進出すべきか、を考えると、現場で格選択を受けない成

分でなければならないが、その点でNP1は駄目である。なぜなら、図1Bと見比べてみて頂くとわかるように、NP1はV1(lassen)の指定辞の指定辞であるからV1の統率力が及び、従ってそれに配率されている。また上部のAGRoに対してもNP1は補語の指定辞の指定辞であるから、やはり統率力が浸透し、従って引率されている。従ってNP1は共統率による対格の格選択を受けることになる。

残る問題は、NP2とNP3という、ともに他動詞1個のみにそれぞれ引率されている項のどちらが主語として適切か、ということであるが、先ほど述べたように、対象の内在的徳性の方が手応え/結果感受者よりも高く評価される局面なので、ここではNP3が優先されるべきである。ところが、前節で述べたように内在的徳性を表すSich#は主格の音形をもつことができない。そこで(同一指示の)NP1(Buch)とNP3(Sich#)との間で音形の交換が起こり、結局NP1がsichとなる代わりにNP3がBuchの形を得る。そしてこのBuchがSPEC_Tの座に転入してAGRsとTから共(挟)統率され、主格を認可されることになる。最終的にBuchはSPECsつまり文主語に地位に就く。なお、手応えの副詞はVP(=V1P)の修飾語としてこれに付加される。

以上がlassen-中間構文の分析であるが、これとlassen-使役/許容構文との相違点は明らかであろう。後者ではV1(lassen)は少なくともstativeではないし、NP3とNP1との音形の交換など起こらず、最初から能動性の強い項がNP3に入り、NP1には最初から共指示のsichが入るので、内在的徳性など問題にならないのである。

5. まとめ

以上見てきたように、目的語候補或いは(図7に見るように)「補文」をVの指定辞に置き、主語候補をむしろ補語に置くSoothは、引率・配率・共統率(挟み統率)の概念とタイアップして、多くの文法問題を解く有力な道具としての有能性を発揮した。一方チョムスキー(1995)は仮説の一大殿堂のlabyrinthに嵌まって身動きできない。a Soothsayer program for linguistic theoryの一幕、いかがだったであろうか。

参考文献

- 田原 薫(1994)研究ノート「経済性とVP内主語説の疑問点」『ニダバ』23号, p. 138~142
田原 薫(1995a)「Xバー理論の徹底批判とその対案V'内主語図式の検討」『言語文化学会論集』第5号, p. 3~19, 言語文化学会
田原 薫(1995b)「指定辞と補語の地位づけに関する一提言」*Kansai Linguistic Society 15*, p. 79~89, 関西言語学会
横山真樹(1995)ハンドアウト「中間構文の認知論的考察—ドイツ語使役動詞lassenを用いた中間構文に着目して—」於 関西言語学会第20回大会発表会
Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. The MIT Press: Cambridge MA.